FA:G達との日常

混沌を孕む律揄先生

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

店員「ところでこのプラモデルを見てくれ。こいつをどう思う？」

主人公「すごく…　かわいいです」

店員「この箱には我が社の希望と切望が詰まっている。決して使い方を誤ってはならない」

この物語は「ＡＳ搭載型ＦＡガールと生活できるキャンペーン」に釣られたオタク学生相川（あいがわ）ナオキと時々親友達が出てくる何の変哲も無い日常の話である。

・登場するＦＡ：Ｇは基本的にアニメとは別個体の所謂ウチの子です

・Ｒ―１５なのは原作のプラモデルキットが１５歳以上対象だからです
・作者の原作知識不足が露見します（基本的にアニメ知識しか無い）
・勿論独自解釈も含まれます
・作者は初心者モデラーです

目次

～プロローグになりきれなかった1話～ ―― 1
フィギュアを買ったら真っ先に逆さにするよね ―― 5
パチ組みで何が悪い。スティ子に悪い 10
名付けもまた一つの醍醐味 ―― 17
試し斬りの時間は武器を扱う上で楽しい時間でもある ―― 21
ちなみに作者の好きなＦＡはシュトラウスです ―― 25
基本的に親友達はアポ無しでやってきます ―― 29
イカしたメンバーを紹介するぜッ！ 33
実は比奈の弟がアニメのマンション管理人なんて設定も考えましたが今のところ没案です ―― 36

～プロローグになりきれなかった1話～

ある日、いつものようにアニメグッズを購入すると、珍しく店員から話しかけられた。
「お客様はポイントが溜まっていますので、特殊なサービスを受けられるのですがどうでしょうか?」
勿論今の僕に断る理由なんて無い
「詳しくお願いします。」

僕が返事をすると店員は書類とパンフレットのようなものをレジ奥から取り出してカウンターに並べた。
「お客様は当社の製品『フレームアームズ・ガール』をご存知でしょうか?」
フレームアームズ・ガール…は
確かファクトリーアドバンス社のオリジナルシリーズ製品だったかな
「まあ名前くらいは聞いた事があります。」
なんでもＦＡ社の製品である
フレームアームズを擬人化させた同人誌が

まんま商品として採用されたシリーズらしい。
「先月より当社の最新プログラムシステムであるＡＳのテストプレイヤーを募集しておりまして、今回累計ポイントが規定以上のお客様に限り一般向けにテストプレイが開始されることになりました。」
なるほど、つまりは僕にそのテストプレイをさせたいというわけか。
店員の説明を聞きながらパンフレットに目を通す。
「まずお客様には、ある程度基本人格が形成された状態でのテストプレイをさせて頂きます。」
ＡＳとは「アーティフィシャルセルフ」というプログラムで、
どうやら成長学習によって、人間の感情をプログラムで再現できるらしい。
いや、その技術力は絶対玩具なんかに搭載するべきものでは無いと思う。
何を思って美少女ロボットに搭載させたんだこの企業（変態）は

そして、このテストプレイはその感情の学習ではなくて
ある程度学習が進んだＡＳの育成らしい。
学習し、形成された人格は一般生活において問題無く稼働し、
最終的な目標である「一般人との共同生活」において支障をきたさないか、その実験

だそうだ。

ちなみに、極端に酷いやり方でなければ育成の仕方は自由だし、対戦玩具であるＦＡ：Ｇ本来の使い方もして良いらしい。

面白そうだし、何よりテストプレイをすると報酬が出るらしいので契約してテストプレイをやってみることにした。

「…　はい。契約書はこれでＯＫです。後は、フレームアームズ・ガールの素体とＡＳの基本となる性格を選んでください。」

パンフレットを開いて５秒で

ドストライクの娘を見つけた。

「この娘でお願いします。」

「スティレットですね。基本となるＡＳの性格も決められますが」

ＳＡ―１６　スティレット。

このドヤ顔やクールな振る舞いこそ「ツンデレ」が合うと思わないか？

カテゴリー〝元気〟を探すと性格　ツンデレ　の文字があった。

その辺はまあ流石と言ったところだよね

「機体はスティレットで性格はツンデレですね。後日自宅へと発送されますので詳しい情報はメールでご確認ください。」

フィギュアを買ったら真っ先に逆さにするよね

朝、興奮していつもより早く起きた僕は
ＦＡ：Ｇの到着を今か今かと待っていた。
ＦＡ社からのメールは飽きるほど読み、
契約書も穴が空くほど読んだ。
スティレットを家に迎え入れる準備は既にできている。
温かいお茶を口に含んだ後に
ふと壁に掛けている時計に目をやると、
文字盤にはデジタル表記で９時５６分と表示されていた。

後４分か。

もしやと思い部屋の窓を開けると少し離れたところにドローンが飛んでいるのが見える。
あれはまさしく、ＦＡ社の配達ドローンだ。

しばらく見ていると
玄関の方へ降りていったので
僕も急いで玄関へと向かう。

ドアを開けると目の前にダンボールが1個置いてあった。
相川直樹様宛
内容物：フレームアームズ・ガール
うん、僕ので間違いはない。
部屋に戻ってダンボールを開けると
中にはテストプレイの注意書きとスティレットのパッケージが入っていた。

僕が指定した個体は
”ツンデレ”の”スティレット”だが、
説明書によればオリジナル個体をベースに軽い育成をしただけなので
完璧に性格がツンデレになるとは限らないそうだ。
まあ僕も完璧なツンデレを欲している訳では無いのでそこはいいだろう。

いざ開封だ！
買ったばかりの玩具の箱を開封する、高揚感。
どんな大人の人でも童心に帰る瞬間だ。

ドキドキを抑えることなく箱を開けると、パンフレットで見たツインテの女の子が目を閉じて横たわっていた。

「ほえー、作りが細かいなー。肌の質感とかもめっちゃリアルだし」
全身を鑑賞した後ごく自然な流れで逆さに持ってパンツを見る。
「うえ!?縞パン!?」
水色の縞々パンツ。
嘗てのネット全盛期を象徴する、と言っても過言では無い程の人気を持つ下着。

それを採用するデザイナーの変態ぶりに感心していると。握っていたスティレットがモゾモゾと動き出した
「ちょっと！いきなり逆さで持つとか何考えてるのよ！」

「えっ、あっゴメン」
手の中で暴れられて、落ちると危ないので慌ててテーブルに戻す
「私はスティレットよ！えーっと、貴方が私のマスター？」
パンフレットで見たあのドヤ顔で名乗ってくれた。
腰に手を当てる。可愛い。
「そうだね、うん。僕は相川ナオキ。君のテストプレイをする事になってる。」
パーフェクトな可愛さで名乗ってくれたので、僕も名前を名乗る。
「マスター、テストプレイについて何か質問とかはある？一応基本的な事は答えられるわよ？」
いやぁ・・・メカ少女がマスターって呼んでくるのいいよね。
「結構スカート短いけど大丈夫なの？」
大体の事は契約書を読んで理解してるつもりなのでデザイン面で聞きたい事をぶつけてみた。
「何言ってるの？これはボディースーツよ？」
そうか、そういう設定なのか。
うん。ボディースーツだから恥ずかしくはないってわけだ。
スカート丈が明らかに足りてないけどボディースーツだから大丈夫なんだ。

うん。
そんな訳あるかどう見てもパンツだよ！

パチ組みで何が悪い。ステイ子に悪い

うん。
パン・・・ボディースーツの事は良いだろう。
スカートの丈が短くでモロ見えてるけどそれもデザイナーの趣味という事で気にしないでおこう。

そういえば、同封されていた説明書によれば武装は自分で組み立てることになっているらしい。
プラモデル作るのって面倒くさそうだよな・・・。
「武装は作らなくてもいいよね」
「いや、どう考えても良くないわよ！」
ですよね。うん。

一応、ニッパーもセットで付いてくるようにオプションを支払ったから工具が足りないとかは無いはずだ。

◆◆◆

ニッパーは…これか。

コトブキニッパー。

パッケージ裏面の説明によれば「握りやすい持ち手と片刃構造が特徴のニッパー」らしい。

アルティメットニッパーっていう上位互換っぽいのも買えたんだけど、耐久度はこちらの方が上らしいのでこっちを買いました。

いざ組み立てようとパーツのついている骨組みを手に取る。

ランナーって言うんだったかな。

説明書で指定された通りのパーツを切り出そうとしたらスティレットからストップがかかった。

「マスター、ランナーを洗うのを忘れているわよ?」

「は？洗うの？」
　洗うとか聞いてないんですけど
「そうよ、洗って剥離剤を取らないとちゃんと塗装ができないわよ？」
　やれやれといった感じでスティレットが説明をする。
　へぇープラモデルってめんどくさいんだな。
「まあ、塗装はしないけど」
　スティレットの動きがピシリと固まったように見えた。
「はぁ？なんで塗装しないのよ！」
「だって面倒臭いし失敗したら怖いじゃん！」

　１０分ほどスティレットと口論をしたが、
　いずれプラモデルの腕が上達したら塗装にも踏み出すという事でスティレットは納得してくれた。
　よかった、これで当面は塗装しなくて済む（ダメマスターの一言）

◆◆◆

プラモデル制作って思ったよりめんどくさくはなかった。
いや、めんどくさくない訳じゃないんだけど。
工程が多いだけでそんなに複雑ではないみたいだ。
ニッパー自体もアニメとかでよく見るパチパチと言った音はなくスッと刃が通る感じ。
スティレットによれば上質なニッパーほど切る時に音がしないそうだ。

説明書を見ながらプラモデルを作ってると、スティレットが横からアドバイスとかしてくれるので
飽きることはなく寧ろ楽しなってくる。

これもスティレットに教わったんだけど
パーツを切り離す時は2回に分けるらしい。
コトブキニッパーならそこまで目立たないが
1回で切り離すとプラスチックに負荷がかかって切り口が白色化するみたい。

パチパチと出来上がった武装をスティレットに装着していく。

装甲は完成。
ガトリング砲もできた。
ランナーの都合で付いてくるナイフも付けるところがないけどとりあえず持たせておく。

「いやーそれにしても日本刀良いよね。戦闘機と日本刀っていうＣＯＯＬな組み合わせマジいい」
とか言いながら日本刀をランナーから切り離していると

「「あ」」
長い方の日本刀が折れてしまった
……
……
……

「なあああにやってんのよぉぉ！マスタァァァ！」
「いや大丈夫！接着すればワンチャン行ける！」

あ、これダメですね。
断面が抉れてます。

「……　ふう」
僕は無言で立ち上がると、
無残にも折れてしまった日本刀をゴミ箱に入れ、
無言でテーブルに戻った
……
……
……
……

「いやーそれにしても日本刀良いよね。戦闘機と日本刀っていうＣＯＯＬな組み合わせマジいい」
「無かったことにしてんじゃないわよッ！」

パーツを切り離す作業に戻るとすぐにスティレットからドロップキックが飛んできました。

痛い。

名付けもまた一つの醍醐味

「よし、ひとまずはこれで完成だね。」
机の上には一通りの装甲パーツを付け終わったスティレットが立っていた。
彼女はゴミ箱の方を気がかりな表情で眺めているようだ。
恐らくスティレットは武装に対して思い入れの強い娘なんだろう。多分。
うーん、やっぱり落ち込んでるのかなぁ…。
「そうだ、名前決めようよ名前」
元々足りない頭を捻った結果、
僕は話題を転換することで気分を逸らすことにした。
「名前？」
「そう、名前。スティレットって名前も可愛いいけどさ、やっぱり名前はオンリーワンだよ。うん。だからさ、何か新しい名前を考えようよ」
「そうね、うん。名前を付けることは重要だと思うわ。」
おっ、反応した。よし
「どんな名前がいいかな？ゲレゲレとか？」

「ちょっと待って?!私にそんな名前付ける気?!」
おっとこれはダメか。そりゃそうか
「うーん…、名前ねえ…。」
名前ねぇ… なんかあったかなぁ… ?
厨二病的にはやっぱドイツ語がいいと思うんだよ。
ズィーベン(セブン)・エルフ(イレブン)みたいな。
「あ、アルフレート!アルフレートってのはどうかな?適当に頭に浮かんだ物だけど」
「へえ、貴方にしては中々良さげじゃない。ま、さっきのよりかは全然マシだわ」
これは気に入ってくれた様子だ。そりゃそうだドイツ語はよくわかんないけど断然かっこいい。

◆◆◆

「とりあえずはテストプレイだね。つまりは試し斬り。新しい武装の性能を確認しなきゃ」
説明書によるとこのセッションベースってのを使うらしい。
「こうやって見るとコップ置きみたいだね。」

平たくて六角形状。少し大きめの湯呑みなんかが置けそうだ。
「私達の元となった実験機体はこのセッションベースを鍋敷きとして使ったらしいわ」
「えっ？」
「冗談…　ではないらしいのよね。私はそう教わったわ。」
「ええ…」

◆◆◆

「えーっと…　？まずアプリをインストールして…　？」
インストールしたアプリを起動すると
すぐに装備のプリセット画面が表示されたので、
作成したパーツを画面上のモデルに装着させる。
「成程、テストプレイ用の仮想敵のデータも設定できるわけね。」
ステージは…　市街地でいいか。
「マスター、準備はいい？始めるわよ」
セッションベースに充電君とかいうガールなのかボーイなのかよくわからないロボットも取り付けた。

後はガールがベースに立って叫べばシステムが起動するらしい。

「行くわよ！アルフレート！」

「フレームアームズ・ガール！セッション！」

試し斬りの時間は武器を扱う上で楽しい時間でもある

「テイクオフ！」
アルフレートがそう叫ぶと、光が迸りセッションベースを包んだ。
セッションベースの上にホログラムの映像が浮かぶ。
それを見るとアルフレートにさっき作った装甲パーツが装着されているようだった。
「テストでも手加減はしないわよ！」
しっかりと決めゼリフを言ってからステージが構築される。
市街地フィールドは、その名の通り家やビルが並び遮蔽物の多い現代的なフィールドだ。
『今回は動作確認だからまずは軽く歩いたりしてみてくれる？』
アプリを通じてフィールド内のＦＡ：Ｇと通信できるそうなのでスマホに向かって話しかけてみた。
「わかったわ。」
アルフレートは軽く手や足を振るのを何度か繰り返した後軽く歩いたりして見せた。
「特に問題はないわ。」

『オッケー、じゃあ次は飛行テストだ。』
アルフレートは軽く地を蹴ると、ブースターを点火して加速し空へと離陸した。
そしてそのまま飛行。加速に減速、ロール旋回やピッチ回転を一通り行う。
『調子はどう?』
「まあまあね。はじめて組んだにしては良い方なんじゃない?」
ツンデレなら外せない「まあまあ」という返答。
やはり心得ていらっしゃる。
『次は武器のテストだね。今までと同じように空中で軽く確認した後地上でもやってみて』
そう言ってスマホを操作し、ターゲット(的)をフィールド内に出現させる。
「わかったわ。」
右手に装備したガトリング砲を構え、的に向かって発射。
銃身が回転し弾が発射され、的を見事に破壊した。
『ガトリング砲は大丈夫そうだね。』
次にアルフレートは左腕に装着した二連ミサイルを構える。
的をロックオンすると即座に発射。ミサイルは少し離れた場所にある的を追尾し、命中して的を爆散させた。

『ミサイルも問題無し。次は近接武器だね。』
腰につけた日本刀（小）を鞘から抜き、左手で構える。
その後ブースターで加速し、的に急接近してすれ違いざまに切り付ける。
的は綺麗に真っ二つになった。
『うわあ、やっぱり日本刀の切れ味は凄いね。使ってみてどう?』
「刀身のゲート処理が甘いんじゃない?鞘に少し引っかかってたわ」
『うぐ、後でキチンと処理しておきます。』
「後はもう一本が折れたりしなければね…。」
『スミマセン。』
「まあいいわ。続きをするわよ?」
アルフレートはそう言うと日本刀を鞘にしまい、右腕に装着したナイフを外して左手に構える。
本当は腰とか腿につけたかったんだけど、できそうになかったんで断念して腕に取り付けたのだ。
アルフレートは再度加速して別の的に接近、今度も問題無く的を破壊した。
「こっちの方は処理がちゃんとできているわね。これだけできるのなら刀の方もちゃんとしなさいよ」

『スイマセン。けど、やっぱり武器はちゃんと処理しておいた方が精度は良くなるわけ？』
「そうね。性能の差も段違いよ。きちんと処理をして、後は塗装したりすればもっと強くなるわよ？」
『それに関してはまた今度頑張ろうと思います。』
「まったく…。じゃあ地上の方も行くわよ？」
呆れるようにそう言うとアルフレートは地上へと降り、また同様にターゲットを破壊した。
『うん。地上でも問題は無さそうだね。調子はどう？』
「うーん。私は地上より飛行しながらの方が動き易いわね。」
『そうなの？やっぱり戦闘機モチーフだからそういう所があるのかな？』
「いや、戦闘挙動については私達は一通りデータをインプットされているのよ。」
アルフレートは刀を鞘に納めて考える。
「けどやっぱり戦闘にはガールのセンスが出てくるわね。私には空中戦が向いているみたい。」
『そういうものかねぇ…。じゃあ次は仮想敵を出してみるからそれと戦ってみてね。』
「わかったわ。マスター。」

ちなみに作者の好きなＦＡはシュトラウスです

スマホを操作して敵の出現を選択する。
「それじゃあこのアント?って言う敵を追加してみるよ」
他にも戦闘パターンや出現場所も自由に設定できるみたいだけど、今回はデフォルトの設定で行くことにする。
画面上の決定ボタンを押すと、フィールド内に骨組みのようなロボットが多数出現する。
恐らくこのロボットの名前がアントというのだろう。
「この程度の敵なんて、楽勝よ！」
アルフレートはブースタで加速すると、日本刀を一閃してアント達を斬り付ける。
攻撃されたアント達は反撃する間もなく腰から真っ二つとなる。
だが、上半身だけのアントがアルフレートに銃口を向ける。
「上半身だけになっても動けるみたいだね。流石ロボット」
対するアルフレートは跳躍と同時に、地面にミサイルを撃ち込み爆発させると、爆風の勢いと共にブースターの加速で空へと飛翔する。

成る程、煙幕で射撃を防ぎつつ離陸時の隙をカバーした訳か。
そしてアルフレートは爆煙が晴れる前にガトリング砲を掃射し、アント達を破壊する。
「ま、こんなもんかしらね。」
アルフレートは空中で腰に手を当てドヤ顔をしている。かわいい。
しかし、そこに動物のようなＦＡ（フレームアームズ）が飛びかかる。
「えっ?ちょっ、きゃあああ!」
ＦＡは見事油断していたアルフレートを捕らえ、地へと堕とす。
フレームアームズ「シュトラウス」
跳躍による飛行ＦＡへの奇襲や、ビーム砲による攻撃が可能な月面軍の量産型ＦＡ…らしい。
敵選択画面に簡単な説明文が記載されているのだ。
ちなみに今は「シュトラウスがアルフレートに馬乗りになって抑えつける」という、色々と捗る状態になっている。
「調子乗ってんじゃ…無いわよ!」
だが、アルフレートはシュトラウスが攻撃する前にボディを蹴り上げ、体勢を崩したところでその拘束を抜け出す。

「ちょっと!･どういうことなのよ!」
「いやね?このザ･量産機みたいなデザインや、逆関節で前傾姿勢の動物的フォルムを見たら一目惚れしちゃってさ?勝手に出現設定しちゃったんだ。ゴメンね?」
「はぁ･･･、まあいいわ。倒しちゃうわね」
　アルフレートは地面を蹴り上げ斜め上方向へ加速すると、背後からシュトラウスに飛び乗り所謂ロデオ状態になる。
　そしてすぐさまナイフを銃口へ突き刺し破壊すると、最後に日本刀でシュトラウスの爪と首（?）を絞めるように引っ掛けた。
　シュトラウスは暴れるが、腕と首の動きを奪われている状態では有効な反撃はできない、
「ここから･･　こうよ!」
　アルフレートは自らの足を立てると、その状態でブースターを点火、シュトラウスを引っ掛けた日本刀へ上方向への力をかける。
「おー、凄い。首を切るつもりだ」
　シュトラウスも抵抗をするが、そこでアルフレートは上体を後ろへ逸らし、ブースターの推力を後方へと向ける。

後ろへ負荷がかかる事は想定していなかったのか、シュトラウスはバランスを崩し、そのまま両腕と首をそのまま両断される。

「ふう。これでどう?」

「いやぁ、えげつないね。うん。試し斬りもこの辺で終わろうか。」

『ＷＩＮＮＥＲ　アルフレート』

直樹がスマホから終了ボタンを押すとアルフレートの勝利を示すアナウンスが流れ、そしてフィールドが閉じられる。

基本的に親友達はアポ無しでやってきます

「マスター、そろそろバッテリーが少なくなってきたから、充電するわね？」

アルフレートを迎えてからもうすぐ一週間が経つ。

特に喧嘩とかもなく、そろそろアルフレートとの生活にも慣れてきたところだ。

「んっ…　んうっ／／／」

この〝充電〟さえ除けば。

なんでも充電口はデリケートな部分らしく、ケーブル接続時のノイズやちょっとした接触等の刺激だけで、変な声が出てしまうらしい。

その…　うん。言わなくてもわかると思うが、僕も一応男子なので毎日この声を聞くのはなかなか耐えがたい。

唯一の救いはこの声を出した後は充電の為眠りにつくで、〝欲求の処理〟を行う余地がある事だ。

ただ、最近は若干日常化してきたので毎回処理を行わなくても耐えられるレベルと

なった。

ふと、眠っているアルフレートを眺める。
アルフレートは腕を頭の下に敷き、若干姿勢を崩した体勢で寝ていた。

一緒に生活していて気付いたのだが、アルフレートはスタンダートな「ツンデレ」とは若干違う性格のようだ。
勿論、ツンデレらしいセリフを言う事もあるが、
戦闘好きだが戦闘狂でなく、軍人っぽいが軍人ではなく、若干男らしいが男勝りでもないし、女子らしい一面もあるが少しズレている、そんな感じの性格をしている。
説明が難しいが、兎に角クーデレとツンデレの中間のようなキャラなのだ。

「まぁこれはこれで中々・・・」
と、そこへインターホンが鳴り響く。

「おーい！ナオキ！遊びに来たぜ！」
　と、活発な男の声
「近所迷惑だろう、もう少し静かに叫べないか？」
　と、若干低い女の声

　どうやら僕の友人達が遊びに来たようだ。
「はーい、今ドア開けるから待っててー」
　ガチャリとドアを開けると、予想通り男女が二人。

「いらっしゃい、透（とおる）、先輩」
「おっす！」
「お邪魔するぞ」

　二人を部屋の中に上がらせる。
「お茶入れるからいつも通り待っといて」
「おう！」
「お構いなく」

◆◆◆

後輩の榎本（えのもと）と一緒に相川の部屋で待っていると、ふとフィギュアのような物が目に入る。

「何かケーブルが刺さっているな。」

私はそのフィギュアを好奇心で手に取り、しかし壊さぬように丁寧に扱う。

見た目はただのフィギュアだが、肌の質感もリアルでしかも目に見える隙間が無いのに関節が自由に動く。

「人間と同じように、骨格の上に肌を装着しているのか？一つ一つの作りが精巧でデザインも無理が無い…。」

若干スカートの丈が短いのが気になったが、相川も男だ。つまりはそういう事ろう。

だが、次の瞬間私はより驚く事となった。

「ちょっと！何寝てる人の体を弄くってんのよ！」

イカしたメンバーを紹介するぜッ！

人数分のお茶を持って部屋に戻ると、先輩がアルフレートに質問攻めをしているのが見えた。
「自然な表情の動きも気になるが、やはり一番はスムーズな会話…。君、ロボットならどんなプログラムを？そうだ、ボディの構造は？単体でホバリングが可能なのか！エンジン構造は？駆動系は？出力は？」
「あ、マスター！この人をどうにかしてくれる？」
アルフレートはこちらを見るなり僕の方へ飛んできて先輩から隠れる。
「先輩、彼女困ってるんで一旦落ち着いてください、ね？」
鼻息の荒い先輩をなだめながらテーブルにお茶を置く。
「ナオキ、ＦＡガール買ったんなら言ってくれよ、水臭いぞ？」
「え？ああゴメン。っていうか透もＦＡガールやってたっけ？」
「成程、このロボットはＦＡガールと言うのか。今度調べておこう。」
興奮した先輩を前に会話に入り込めなかったらしい透を横目に先輩がメモを取る。
するとアルフレートがちょいちょいと腕をつつく。

「マスター、この人達はマスターのお友達？」
「ん？ああ、そうだ紹介しなきゃね。僕の友人の榎本（えのもと）　透（とおる）さんと、こっちは僕の先輩の五十嵐（いがらし）　比奈（ひな）さん。」
　一人一人指しながら名前を紹介する。
「よろしくな！」
「よろしく頼む。」
「それで、こちらはＦＡガールの・・・
「アルフレートよ！」
　アルフレートは僕が紹介し終わる前に自己紹介をする。
「どうやら榎本もこのロボットを知っているようだが、一体全体なんのロボットなんだ？」
　先輩が目を輝かせながら質問する。
　学習する事が好きで探究心も強い先輩はやはりそこに興味があるのだろう。
「これはな、フレームアームズ・ガールというファクトリーアドバンス社の製品で、恐らくテストプレイキャンペーンで貰える特別な奴だ。」
「ファクトリーアドバンス社！どうりで作りが精巧な訳だ。」
　透の説明に先輩が納得する。

「まさかお前がＦＡガールに手を出すなんてな～。」
「じゃあ透も持ってる訳？」
「おう！武装もいっぱいあるぜ！今度持って来てやるよ」
　透は両手を広げて〝いっぱい〟を表現する。
「お～、ありがとう。それで今日は何の用があって来たの？」
「〝いつも通り〟だ。」
　フフ、と先輩が笑い透が付け足す。
「おう！特に用は無いぜ！」
「了解、じゃあいつも通り暇を潰そうか。アルフレートはどうする？」
「私はまだ充電が済んでないから、寝ているわ」
　アルフレートは欠伸をしながら充電くんの方へ行き、口を閉じていつもの喘ぎ声を我慢するようにしながらプラグを指すと横になる。
「ＦＡガールか・・・面白そうだな。」
　先輩は一人で呟いた。

実は比奈の弟がアニメのマンション管理人なんて設定も考えましたが今のところ没案です

「うわ。」
「どうしたの？マスター」
「僕達ってまだ一週間ちょっとしか生活してないよね？」
「そうね。それがどうしたの？」
「ポイント報酬ってこんなに貰えるのか…」
先日ポイントファクトリーアドバンス会員が購入時に利用できるポイントが振り込まれていたので確認をしてみたのだが、想像以上に数字が増えていた。
「私達の試作機が一般人とテストプレイした時も結構な額が振り込まてたみたいだけど、今回は現金じゃなくてポイントだから思い切って報酬の量を増やしたようね。折角だし、武装とか買ってみたら？」
成程、並行して武装や他のキットも買わせようって魂胆か。
「前から使ってなかったポイントも結構あるし、今日は久々にファクトリーアドバンス

に行って武器でも買ってみるよ。アルフレートも一緒に来る？」
「いえ、私は家で待ってるわ。その代わりに…」
アルフレートはビシッと指を指して言い放つ。
「アンタのセンスを試してあげる！私のアドバイス無しに強い武装を選んで買ってきなさい！」
これは挑戦状か。
アルフレートとは初日の試し斬り以外には普通の生活しかしていない。
つまり、バトルでの信頼は培われていない訳だ。
「武装のセンスを見て採点するって訳だね！受けて立つ！」

◆◆◆

先日の訪問でＦＡガールの事を知った私はここ数日ネットや資料を見てＦＡガールについて調べていた。
そういえば、弟のスバルはファクトリーアドバンスのプラモデルが好きだったはずだ。
私はコンコンとノックをし、返事が返ってきたので扉を開けて弟の部屋に入る。

「なに？姉ちゃん。」
「お前、ファクトリーアドバンスのプラモデル好きだったよな？」
「うん、そうだけどそれが何か？」
弟は作業の手を止め、こちらを振り向く。
凝り性な弟はプラモデルにも例外なくのめり込んでおり、部屋にはプラモデルに使う機械類や工具で溢れていた。
「フレームアームズ・ガールという製品はやっているか？」
「あー、ＦＡガールね。面白そうだとは思うけど、今の所手を出せてないんだよね。」
「そうか。お姉ちゃんは近々そのＦＡガールを始めたいと思ってるのだが、その時は教えてくれないか？」
「そうなんだ。工具とかはいっぱいあるからその時は貸すよ。あ、後姉ちゃんのスマホで登録してるポイントとかも使って良いよ。」
「恩にきる。じゃあ失礼したな。」
「はーい。」
弟はガラケー派なのでスマホが必要な場合は私のスマホを利用しているのだ。
ＦＡガールは高価なキットらしいのでポイントの利用許可は有難かった。